

つた陽平

石古美穂子

おじいさんの家は、山のすそ野に広がった小さな村の、小高い丘の上にある。家を一步出ると、田畑が一望のもとに見下ろせる。

晴れ渡った空は、輝きを増し、華やいだ春の色だ。雀たちは、木の枝でてんでおしゃべりしている。

「ああい天気だ。空気がうまい」

おじいさんは、大きく伸びをすると、深呼吸した。

「さてと、ご飯の用意だ」

家の中へ入ると、朝ごはんの仕度にとりかかった。梅干とありあわせのおかずで、簡単な朝食が始まる。

おじいさんはこの春、八十歳になった。わずかばかりの田畑を耕し、山菜とりなどをして暮らしている。

食事を済ますと、仏壇の前に座り、チーンとかねをならして手を合わせた。

「おつかさん、今日はいいい天気なので、山菜とりに行ってくるでな」

竹かごを背負って、手ぬぐいを首にまき、家を出た。

畑中の道を通り、村の家並みを後にして、どんだん山の中へ入っていく。

どこからか、一匹の蜂がやってきた。

おじいさんのまわりを、つかず、離れず、飛んでいる。

蜂は、一生懸命話しかけているつもりなのだが、気がついてくれない。

おじいさんは、物思いにふけりながら、山道を歩いていた。

おじいさんの名は陽平。

「おじいさん」と呼ばれてもう久しい。

陽平は、生まれて間もなく父親を亡くし、母親と暮らした日々だけが記憶に残っている。幼い頃から家の手伝いを良くし、あまり丈夫でない母親を助けた。

学校から帰ると、すぐ母親といっしょに畑に出る。陽平は、土にまみれて陽の光の中で働くのが好きだった。母は、そんな陽平を大切に思い、陽平もまた母が

大好きであった。

母は二十年前、陽平が六十歳の冬、風邪をこじらせてあっけなく亡くなった。

一人暮らしのわびしさを感ずるようになったのは、この頃からである。

陽平は、ずっとひとり身で今日まで来た。

もちろん、結婚の話がなかったわけではない。働き者で、気立てが優しく、男らしくてりりしい陽平は、村でも評判だった。遠くの村や町からも縁談を持ってくるものがいた。

陽平が、結婚話に耳を貸さなかったのにはわけがある。彼には悲しい過去があったのだ。

陽平が小学校六年の春、村にしづという娘がやってきた。しづは、陽平の家から三軒むこうの太助じいさんの孫娘だ。

両親は都会で結婚し、しづが生まれた。

彼女も、都会で育ち、何不自由なく暮らしていたのだが、ある日突然、交通事故で両親を一度に亡くしてしまった。彼女は、太助じいさんに引き取られることになった。

しづが太助じいさんの家へやってきた日、陽平は同級の作次や次郎たちと垣根の外からそつとのぞいていた。

「ほら、見る。えらいべっぴんだぞ」

作次は陽平をつついた。

「ほんに、ほっそりと色白で、お姫様みたいだ」

次郎は、ため息とともに言った。

「あら」

縁側で荷物の整理をしていたしづがふいに顔を上げた。目が合ってしまった陽平は、あわてて顔をそらせた。

「行こう」

先に立って大またに歩いていく陽平に、作次と次郎は、ふふくそうについてくる。

「あの子、同級になったらいいなあ」

作次の言葉に次郎もうなずく。

陽平はもちろんそう願っていた。

しづはみんなの願い通り、陽平たちと同級になった。同い年で、六年は一クラスしかなかったから。

太助じいさんは、しづのたった一人の身内だった。両親を失い、なれない田舎にやって来ての二人暮らし。そんな境遇にあっても、しづは懸命に明るく生きようと振舞った。

陽平は、そんな彼女の味方になってやろうと心に決めた。

山道を歩きながら、おじいさんはふと足を止めた。

「陽平さん」

と、誰かが呼んだような気がした。

あたりを見まわしたが、だれもない。

「そんなわけ、あるはずないか」

おじいさんは、苦笑いして首をふった。

今では、「陽平さん」なんて呼ぶものはいない。

道端のアカシヤの枝から、一匹の蜂が飛び立ったのに、気がつかなかった。

「さあ、もうすぐだ」

急に狭くなり、上り坂になってきた道を、一歩、一歩踏みしめながら、先を急いだ。

とつぜん、おじいさんの頭の中に、六十年前のできごとが、鮮明によみがえった。

忘れようとしても忘れられないあの日のこと……。

気がつくと、道を左に折れ、足はひとりで、あの場所へと向かっている。

しばらく夢中で歩く。

せせらぎの音が聞こえる。

どこかで、うぐいすの声。

新緑の木々の下、水音がしだいに大きくなってくる。

見覚えのある柿の木が見えてきた。
思わず走り寄る。

「ああ、あの時のままだ」
木の下に座ってみる。

足もとには、川の水が木漏れ日にきらめきながら流れている。

「しづさん」
声に出して呼んでみる。

「陽平さん」

驚いてふり返ると、そこにしづの白い顔。

しづは、ゆっくり近づいてくると、横に並んで座った。

陽平は、しづと同じ二十歳の昔にもどっていた。

しづが村にやってきた六年の時から、陽平は村のわんぱく坊主どもからしづを守った。彼女は、そんな陽平を頼もしく思い、慕うようになった。太助じいさんは、昔、村役場に勤めていたらしいが、今はいんきよ生活。

息子夫婦を一度に失い、気落ちしてめっきり弱ってしまった。もうすぐ都会で息子たちと一緒に暮らすつもりにしていた矢先だった。

しづは、そんなじいさんを助け、家事などもよくした。

二人が山すそにある中学校を卒業する年、しづが病気になった。結核だった。

昔はろうがいといい不治の病とされた。人にうつるので嫌われもした。

卒業式の前日、学校からの帰り道、しづはなぜか黙りがちだった。

「どうしたの？ 何かあったの？」

問いかける陽平に立ち止まって言った。

「私たち、もう会えない」

「えっ、どうして」

目にいっぱい涙をためている。

「私、病気なの」

「でも、こうして元気にしてるじゃないか」

陽平は、うつむくしづの両肩をつかんだ。

「明日は来るんだろ」

黙ってうなずく彼女の肩の手に力をこめた。

「卒業式が終わった後、いつもの沢のほとりへ来るんだ。いいね」
ちようど家の前に来たので、念を押して別れた。

沢を見下ろす若い柿の木の下で、しづは先に来て待っていた。

「やあ」

陽平の声に気づき、ふり返ってほほ笑んだ。

この場所は、二人が中学生になって何度か来た思い出の地だ。
時おり、うぐいすの音が聞こえるほかは、谷川のせせらぎの音だけ。
しばらく沈黙が続いた。

「病気って、ほんと？」

陽平が口をきった。

しづは黙ってうなずいた。

「ほんととは、こうして話してもいけないんだけど、最後だから……」

えんりよがちに、少し身を引いた。

「どうしてそんなことを言うんだ。ぼくら、友達じゃないか」

怒ったような陽平の声に、しづは、今までのことを話した。

ここ三週間ぐらい前から、少しからだがだるく、微熱が取れないので、診療所
で見てもらった。検査の結果、結核だと言われたことなど。

「結核だって、治らないってわけじゃない。こうして、元気してるんだから」

「ええ。私だって、治るつもりにしてるわ。でも、しばらく会わないで、しっかり
養生しようと思って」

「それを聞いて安心した。元気になるためなら、会えなくてもがまんするよ」
意外に明るいしづの様子に、陽平はほっとした。

「あの、お願いがあるの」

「なに？」

「わたしね、陽平さんのお嫁さんになりたい。病気が治るまで待っててくれる？」

「もちろん」

「や、く、そ、く」

歌うように言って、白い小指をさし出した。

畑仕事でふしくれだった自分の手を恥ずかしく思いながら、陽平は小指をからませた。

将来、結婚するならしづ、と思っていた。が、今、彼女からその言葉を聞き、初めてその手に触れたことに、胸の中が熱くなった。

「ありがとう。わたしががんばる。お元気で。一足先に帰るね」
病気であることを感じさせない身のこなしで、しづは木々の向こうに消えた。

おじいさんの心は、一気に六十年前にもどっていた。

沢鳴りの音。

時おり聞こえる小鳥の声……。

(横にしづが座っている)

その思いが、おじいさんの乾いた心を潤していった。

もう一度、確かめたくて横を見た。

(いない！ しづがいない)

立ち上がってあたりを見まわす。

だが、人の気配すらない。

やっぱり、あれはまぼろしだったのか。

がっくりと肩を落とし、腰をおろす。

何気なく、目の前の柿若葉に目をやる。

一匹の蜂が羽音をたてて飛び立った。

蜂は、おじいさんのまわりを飛びまわる。

なんだか優しい気持ちになって、ふと手をさし出した。

蜂は、待っていたかのように、おじいさんの手に止まった。

「しづさん」

思わず叫んでいた。

あの、初めて小指をからませた時の、感触が、そこにあった。

指切りした日から、しづは陽平の前に姿を見せなくなった。家の前を通る時、会いたい思いにかられたが、がまんした。

太助じいさんに、少しぼけが始まったというつわさを耳にした。飲めなかった酒を飲んでいるという話も聞いた。

ある日、畑仕事の帰り、陽平は、垣根近くにあるしづの部屋の窓辺に立った。

カーテンが開いていて、寝床が敷いてあるのが見えた。

横になっていたしづは、急にからだを起こした。背を波打たせ、ひどくせき込んでいる。走って行って背中をさすってやろうと思った。

しづがこちらを見た。驚いた様子で、激しくかぶりをふって、来るなというしぐさをした。陽平は、しかたなくその場を離れた。

しづの病状は、よくなるどころか、目に見えて悪くなっていった。

医者が来ているふうにも見えなかった。太助じいさんは、飲んだくれて、アル中寸前に見えた。しづの世話をしている様子もない。

陽平は思い切って、しづの世話をしたいと太助じいさんに申し出た。じいさんは、最初しづい顔をしていたが、昼間、一日に一度という条件で承知した。

しづは、うつってはいけないのでと、拒んでいたが、陽平の好意がよほど嬉しかったらしく、訪れる時を待ち望むようになっていった。

家で採れた新鮮な野菜や、卵など持って行くと、さすがにじいさんも喜んだ。

五年の歳月が流れた。

しづは、陽平が訪れるようになって、少し病状が回復したかに見えたが、一進一退で、最近では、喀血もしばしばという状態になっていた。

二人そろって二十歳を迎えた春の日のこと、陽平は、しづの部屋にいた。今日は、体調が良いらしく、しづは、起き上がって窓辺に腰かけている。

「起きててもいいの？」

「ええ。とても気分がいいの。陽平さんの卵入りおかゆ、おいしかったわ」

うらかな春の日ざしが、三つ編みにしたおさげの上で揺れている。

こんな楽しそうなしづは久しぶりだ。

「覚えてる？ あの日のこと」

「あの日って？」

「約束したでしょ。例の沢のほとりで」

「ああ、忘れやしない。覚えてるとも」

「あれからずつと行ってないわね。あそこへ」

陽平は、感慨深くうなずいた。

どんなに行きたいと思っただか、二人して。

「行ってみない？ 今から」

「えっ、だって……」

「わたしなら大丈夫。ちゃんと歩けるから」

しづが、ここ数年、外へ出たことがないのは陽平が一番よく知っている。あの山の中で歩くのは無理だということも。

「ね、お願い、あそこへ連れてって。今日行かなければ、もう一生行けないような気がするの」

手を合わせて拝まれると、心が揺らぐ。

(願いを聞かないで、後に後悔するようになったら……)
心を決めた。

「よし、行こう。むこうまで負ぶってく。休み休みしながらね」

陽平は立ち上がった。

沢のほとりに着くまでに一時間あまりかかった。陽平ひとりの足なら十五分もあれば十分だったのだが、しづの体を気づかい、休憩しながらゆっくり来た。

しづは、意外にも元気だった。

「あの頃のままだわ。柿の木が少し大きくなったかしら」

木漏れ日が、上気した頬にしま模様を作っている。

「そうだね。懐かしいなあ」

二人は楽しかった中学生時代の思い出にひたっていた。
静かな時が流れた。

せせらぎの音だけが大きく響く。

「川原へ下りて、石伝いに歩いてみたいわ」

「だめだよ、そんなこと。水にぬれたらどうするんだ」

「さつき土で汚れたから、手を洗いたいの」

木の枝を伝って、もう斜面を下り始めている。陽平は、あわてて手を貸した。

「ああ、冷たい。いい気持ち」

石の上で、子供のようにしゃいでいる彼女を見て、連れてきてよかったと思っただ。

「さあ、もう上がるっ」

素直に手をさしのべるしづ。

その時、体がぐらりと揺れ、激しくせき込んだ。あわてて手に力をこめたが、彼女の片足が流れに落ちた。溪流が、みるみる真っ赤に染まっていく。

陽平は彼女を抱き上げると、無我夢中ではだしのまま走り出した。

徹夜の看病のかいもなく、しづは明け方、二十歳の若い命を終えた。

どこかでまた、うぐいすが鳴き始めた。

おじいさんは、われに返った。

六十年前の日々が、これほどはつきりと思い出せたのは、不思議に思う。

木漏れ日が、暖かく身を包んでいる。

「そうだ。山菜とりに来たんだっ」

このあたりにも、山菜がよくとれる場所があったのを思い出した。腰を上げて、茂みの奥へと入っていく。

「あつた、あつた」

雑木林を通り抜けたところに、わらびやぜんまいがたくさん生えている。

夢中になってとり始めた。

さっきの蜂が、まわりを飛んでいるのに気がつかない。

「ああ、わからないのね。神様が命を与えてくださって、こうしてまた、あなたに会えたと言うのに……」

蜂はおじいさんを見、そして何気なく前方の茂みに目をやった。

「あつ」

驚いて高く高く飛び上がる。

一匹の大きな熊が、おじいさんの背後にのっそりと近づいているのだ。

「陽平さんが危ない！」

蜂の小さな胸は、つぶれんばかりだ。

背後に物の気配を感じて、おじいさんはふり返った。

大きな口をかつと開け、両手をふりあげ立ち上がった熊が、すぐそこにいる。へなへなと座り込んでしまった。

その時、一匹の蜂が、弾丸のように熊の左目にぶつかって刺した。

「ウオー」

叫び声をあげ、熊は目を押さえるや、くるりと後ろを向いて逃げていく。

「陽平さん」

耳元でささやく声。目を開けると、しづの膝の上に抱き起こされていた。

おじいさんの顔に、静かな笑みが広がる。

もうろうとした意識から覚めた時、目の前に、一匹の蜂のしかばねがあった。

飛び起きてそつと手のひらにのせる。

「助けてくれたんだね、しづさん」

おじいさんは、立ち上がって歩き出した。

「お墓を作ってあげよう。しづの墓と書いてね。わたしももうじき行くよ。来世

こそいつしよになれるよう神様にお願いしよう」

そんなおじいさんと手のひらの蜂に、お日様は、暖かい光を惜しみなく降りそそいでいた。